

第一朗読：箴言(箴言9・1-6)；わたしのパンを食べ、わたしが調合した酒を飲むがよい
答唱詩編：(詩編145・10+11、13ab+14、15+16)；いのちあるすべてのものに、主は食物を恵まれる。
第二朗読：使徒パウロのエフェソの教会への手紙(エフェソ5・15-20)；主の御心が何であるかを悟りなさい
アレリヤ唱：(ヨハネ6・56)；わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む人はわたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにいる。
福音朗読：ヨハネによる福音(ヨハネ6・51-58)；わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物である

今日の福音は聖体について述べられています。このパンであるイエス・キリストを食べるならば、その人は永遠に生きるのです。この生きるとは、この世に永遠に生きるという意味ではありません。神の国の中で生きる永遠のいのちのことを示しています。

今、生きているいのちは限りがあります。しかしイエスのからだをいただいて生きるのはこの世を越えても生きていくという救いを示しています。この救いとは永遠のいのちに導かれていることによる救いなのです。イエスを信じることにこそ永遠のいのちがあるのです。

「わたしは天から降って来たパンである」とイエスは言ってきましたが、ここで「わたしの肉」「わたしの血」という新しい言葉が出て来ます。つぶやき始めたユダヤ人たちは、この言葉を聞いて激しく議論し始めます。なぜならユダヤ人にとっては肉を食べることや血を飲むことは考えられないことだったからです。

まず肉を食べるにはその人を殺さなければなりません。人間を殺して食べるのかということでもユダヤ人は違和感を感じたのです。そして血を飲むというのは律法で禁じられていました。出エジプト記には家の入口に子羊の血を塗って神の裁きを過ぎ越したように、儀式のために与えられたものであると定められています。

レビ記17章には次のような掟があります。「わたしはイスラエルの人々に言う。いかなる生き物の血も、決して食べてはならない。すべての生き物の命は、その血だからである。それを食べる者は断たれる。」

イエスははっきりと言います。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」ミサの中でいただくキリストのからだと血の根拠はここにあります。イエスが最後の晩さんで行った記念として続けているだけではなく、永遠の命を得て復活させてもらうためにミサの中で行い、わたしたちはキリストのからだをいただくのです。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」イエスを食べることによっていつもイエスの内にわたしたちはいるのです。そしてイエスを食べることによってわたしたちの内にイエスはおられるのです。この「内にいる」という言葉は「とどまる」とか「つながっている」と訳されることもある言葉です。

ヨハネ福音書の15章にぶどうの木にその枝がつながっているという表現がありますが、それと同じ言葉です。イエスとわたしがお互いにそれぞれの内にいること、言い換えればおたがいつながっていることによって、永遠の命が得られるのです。そして復活の約束がそこにはあるのです。

「これは天から降って来たパンである。」「このパンを食べる者は永遠に生きる。」「これ」とか「このパン」というのはイエスご自身を示しています。同時に「イエスご自身が与えるパン」をも意味します。イエスを信じることとご聖体をいただくことには同じ意味があるのです。ご聖体をいただくことは行為としては一番の信仰宣言であり、すべての秘跡に勝るものであると言えます。信仰と愛によってイエスに結ばれていたい、そういう生き方をしたいという意思表示が聖体拝領なのです。イエスがこの世に残してくださったご聖体の恵みに感謝し、それぞれの祈りをささげましょう。